

# グローバル化の進展と不動産市場における庭園・邸宅ビジネスの可能性について

A monograph on the possible growth of real estate market of high quality Japanese residences with Japanese gardens regarding the globalization.

川井 徳子\*

Noriko Kawai\*

## 1. はじめに

現在、訪日外国人観光客が年々拡大している。また、官民一体で取り組まれたキャンペーンから「和食」がユネスコの無形文化遺産として国際的に認められた。これら5の例からは国際社会における日本文化の注目度が高まっている、あるいは高めうることを示すと考えられる。

日本庭園、あるいは日本庭園を含む邸宅や町並み、「和の建築と庭園の技術」についても、同様に国際社会に開かれていくこと、すなわち、グローバリゼーションにより10その価値が高まり、継承の意義と実現性が高まること

が十分期待できると私は考えている。本稿の目的はグローバリゼーションの中で「和の建築と庭園の技術」の価値の向上と継承のためにどのような取組を行うことが重要か、これまでの事例と共に得られた15ヒントとグローバリゼーションの意味を紹介し、将来の技術を支える社会的基盤についての理解を得て、庭園と庭園にかかる技術の向上と継承のこころみを着実かつ

実り多いものに繋げることである。決して多くはない経験ではあるが、今後の庭園邸宅ビ20ジネスに関し、グローバル化と国内市場の可能性について考察してみたい。また、庭園の市場化に成功した場合に、造園技術に関しての可能性や、この分野の成功に必要な環境整備を考えてみたいと思う。

## 25 2. 邸宅の市場

### (1) グローバルな邸宅市場

グローバルな市場では、邸宅、庭園つき住宅が極めて高い評価を得ることがある。なぜ高く評価されるかを理解するための要点は、日本国内の市場における富裕層と30異なる振る舞いをする国際市場の顧客を理解することにある。国際市場において庭園に高い価格をつけるのは、「ビリオネア」と呼ばれる総資産1,000億円以上の超富裕層である。

米国の雑誌フォーブスは、毎年「世界の富裕層ランキング」を発表している。昨年2016年の発表では、10億35ドル(1,200億円)以上の資産を持つビリオネアといわれる超富裕層は、世界に1,810人いる。また、クレディ・スイスの発表では、一桁少ない1億ドル(120億円)以

\*:ノブレス・グループ代表

40上の資産を持つセミ・ビリオネアは1万7,000人と言われている。このようなグローバル市場で活動する超富裕層ビリオネアは、日本に280万人いる富裕層<sup>1)</sup>ビリオネアとはまったく異なる消費パターンを持っている。

一般的に富裕層はその資産を①金融商品②株式等③45不動産④美術品等に分散して保有している。不動産に限ると自宅だけでなく、別荘をグローバルな事業活動に応じて、世界各地に保有する。ビリオネアクラスが保有する別荘は、平均4つと言われており、セミ・ビリオネアと合すると彼らの所有する個人的な邸宅は、世界中で数50万はあると思っ

て良い。美術品のオークションで有名なクリスティーズやサザビーズの関連企業エステートのホームページをみれば、数千万~1億ドル、場合によっては数億ドルの邸宅が紹介されている。ちなみにこの2社が世界で展開する富裕55層向けの住宅ビジネスの年間取引高で20兆円と言われ、これは日本全体の住宅産業の二倍の市場規模である。

彼らの1割が日本に興味を持つだけで、日本の住宅・建築・造園・文化芸術の産業が大きく変わる可能性がある。

### 60 (2) 邸宅の国内市場

残念な事に、これらグローバルな超富裕層向けの邸宅・別荘等についての市場が日本国内で成立しているとは言い難い。東京都心部には数億~10億を超える住宅はいくつかあるが、それらの大半は、土地価格が高いため65であり、しっかりと庭園をもつ優雅な邸宅は殆どない。

かつてクリスティーズと提携したビジネスに乗り出した三菱地所は撤退し、現在はサザビーズのみが日本に代理店を残している。

70しかし、日本国内で1億ドルを超えるセミ・ビリオネアでも800人程度しかいない。全人口に占める割合は、100万分の5であり、ビリオネア向けの特別な事業が成立するのは難しい状況にある。また、日本国内のビリオネアが世界のビリオネアに占める割合は4%にすぎない、富裕75層の1割近くが居住するという分析からはずいぶんかけ離れている。雑駁な言い方をすれば、「日本には小金持ちは、たくさんいるが、セレブリティ(神に祝福された

\* Noblesse Group CEO

人) と呼ばれる、国際基準でのビリオネアは殆ど存在しない」ということになる。結果的に「日本の国内市場」には、ビリオネア向けのビジネスも存在しない。この事は、ビリオネアが日本に邸宅を保有することはグローバルな市場が成立している諸外国に比べて困難であることを示している。

### (3) ビリオネアの邸宅取引の実際

筆者は縁があってビリオネア・セミビリオネアに、邸宅を紹介するビジネスを2例手がけることができた。一例は世界ランキング10位内のビリオネア、もう一例は、100億円以上のビリオネアを顧客とする取引である。他に海外企業を通じて、中東の超富裕層から購入の打診の例がある。

顧客に共通する特徴を概観する。全員がプライベート・ジェットで移動する人々である。彼らは、忙しい。それ故、飛行機での移動時間についてはお金を惜しまない。同時に、それは彼らの住居に国境がないことを意味する。彼らは日本の上場企業が運転手付きの車で移動する感覚で、自由に世界のビジネスの現場を飛び回っている。彼らが不動産市場にアクセスする時は、クリスティーズ・サザビーズといったオークションハウス等欧米のハイクラス専門の不動産会社を通じて購入している。

彼らは不動産購入時の選択理由も明確である。単なる「住まい」を超えて「芸術的な価値」を持つものを求め、美しくデザインされた空間「一級品」の価値が求められている。さらに、その「価値」は手入れ良く長期保有することを通じて、他者により高い価値を認められ、高値で譲渡可能な資産、すなわち「市場を介した価値継承が可能な資産」でもなくてはならない。この点は「新築時が最も高く、購入後は値下がりするもの」住宅を「耐久消費財」と位置付ける日本の不動産市場の考え方はまったく異なる。

ビリオネアは、現役の大工ではなく、過去の一流大工、一流造園家が建築作庭した邸宅を、気に入った庭師とともに、オーナーが隔々まで気にかけて、心を込めて手入れしたい、と思っている。日本庭園の美しさに芸術的価値を認めて購入するのである。

場合によっては、日本庭園とは別荘オーナーが庭師と共に自己表現する芸術活動の場と思っているかもしれない。もし、それが価値を失わず、より高い価格で売却出来たとしたら、自らの芸術性が評価されることになるので、非常に高尚な趣味ともいえよう。

彼らは庭園・邸宅の価値が下落しないことを念頭において、入念な手入れを行う。場合によっては、オーナー自らのセンスやデザインにより、改築や美術工芸品等で付加価値を高めることで、投資不動産として成功できるような価値の向上を意識している。つまり、彼らにとって庭園・邸宅とは、住むためのものというより、価格維持もしくは価格向上が見込まれる投資対象である。それ故、それを販売するチャンネルも極めて重要であり、芸術品・

美術品を扱うオークションハウスと関連する企業に集中することになる。世界中を文字通り飛び回る彼らが所有する不動産は、先にあげた二つのオークションハウスを中心に取引される。そのため、景気変動や為替の影響は受けても、所在する地域の地価下落の影響を受けにくい。

### (4) 日本における富裕層向け邸宅市場のポテンシャル

そのようなビリオネアが日本で別荘を次々と求め始めたとしたら、その市場規模はどれくらいのものとなるだろうか。トップクラス2,000人は、平均4つの邸宅を持つ。その何割かが、日本で別荘を持つことは決して不思議なことではない。むしろ、今我々はなぜ日本で保有してこなかったのか、と問うべきである。仮にビリオネアの2割が5,000万ドル(60億円)の家を日本に持ったとしたら、その資産規模は1兆円を超えるだろう。

次のセミ・ビリオネアの10%、2,000人が500万ドル(6億円)の庭園・邸宅を購入したとしても、1兆円の資産市場が出現する。彼らは庭園や邸宅管理に対して、しっかりと費用を支払うため、セキュリティや維持管理の費用だけでも、1,000億円規模の大きな産業となる。さらに、庭園はオーナーと庭師との共同作業により、より芸術的に深い作品となる性質を持っている。先ほどのように、邸宅を投資対象として考えるビリオネア達の日本庭園への興味が高ければ、少なくとも経済的に、そして望むべきはより良い庭園の継承につながる、裾野の広い大きなブームとなることは間違いない。

### (5) 日本の邸宅のストック、デメリットとメリット

日本国内の富裕層は邸宅といっても住宅の価格は数千万、大きさも百坪程度で、千坪を超える家屋敷に居住する例はほぼない。ビリオネアとセミ・ビリオネア、そして国内富裕層の違いは投資できる資金量の差である。ビリオネアが興味を持つのは、おおよそ5千万~1億ドル(60~120億円)の邸宅である。セミ・ビリオネアでは、さすがにその価格の不動産には手が出ない。彼らの求める価格帯は、概ね1千万ドル(12億円程度)までと想定される。

日本国内にビリオネアの希望に合う邸宅はあるだろうか。

日本の住宅市場を検索しても、ビリオネアはもちろんのこと、セミ・ビリオネアの関心をひくような不動産に出会えることはほぼあり得ないのだ。確かに東京には1千万ドルを超える不動産がある。しかし、それらは「土地の価格」であって、決して魅力的な不動産ではない。彼らの求めるスケールに対して小さすぎるからである。

また、日本的な情緒や文化といったものをまったく表象してはいない。なぜなら、日本人自身がそういった情緒や文化を切り捨て、西洋化と効率重視のライフスタイルをとってきたからである。

では、世界のビリオネアにとって日本の邸宅は、魅力がないのだろうか。

一方の日本の邸宅の利点を列挙すると、

- 1) 治安の良さ
  - 2) 大気・水・森林資源など環境
  - 3) 空港設備、金融システムなど社会インフラ
  - 5 4) 和食をはじめとした質の高い飲食等のサービス産業の充実
  - 5) 癌や外科手術、再生医療等、最先端医療システム
- などがあげられる。

10 先進国の一翼である日本の社会インフラは、欧米社会と比較して決して引けを取らない。

これらのメリットは世界の状態との相対的なポジションで評価され変動する要素になる。近年のヨーロッパの大気汚染と治安の悪化である。

15 大気汚染に関しては、中国・インドが有名だ。しかし、ヨーロッパの都市部の大気も相当に深刻であり、パリではスモッグがひどいため、自家用乗用車が運転できる日を車のナンバーで偶数と奇数で制限をかけ、それでも一朝一夕で解決がつかない状況になっている。また、大量

20 の難民流入の問題と、テロが頻発し治安の悪化が著しい。そういった人々からすると犯罪発生率が、どの先進国より一桁低い日本の治安は、とても魅力的に見えるようだ。私は別事業として営むホテル経営を通じて、日本を訪れる外国人観光客が急速に拡大したことについても、観

25 光キャンペーンと経済政策による円安効果の結果に加えて、このような社会基盤的な要因に支えられていると思われる。

さらにビリオネア達の投資においても、アジアの経済成長は魅力的である。日本のバブル崩壊以降、この 25

30 年あまり、欧米からの投資の拠点は、香港・上海・シンガポールに置かれていた。しかし、中国政府の締め付けによって香港の一国二制度は事実上なきに等しくなっており、これまでより、香港の魅力が薄れてきている。そのうえ、大陸は環境問題が年々ひどくなってきている。。

35 いまや、中国の富裕層が日本の都心にマンション等の別荘を保有しているのだ。前章でも述べたように、ビリオネアは、グローバルに活動している。その人々が、日本に二つ目三つ目の邸宅を保有する可能性はかなりあると推測できる。

40

### 3. ビジネスとしての庭園継承と課題

ここまで潜在的なビリオネアの欲求、日本で本格的な庭園や邸宅を持ちたいとあこがれる人々のニーズの可能性について説明してきた。では、その人々の潜在ニーズ

45 をさらに刺激し、それを市場を介した継承として具現化させるには、日本の庭園・邸宅に関わる人々はどう対処すべきだろうか、あるいは、何を活性化すればいいのだろうか。

ビジネスの基本は、①マーケティング、顧客を知ること、そして②品質の伝達、自分たちの打ち出す内容、自

分が売ろうとする財やサービスが何かを深く知り、求める人に伝えることである。

#### (1) 潜在的な顧客例の想定

ここで、想像の中で一つの可能性を考えたい。もし、55 アップルの創業者でディズニーの筆頭株主でもあったスティーブ・ジョブズ氏があと5年長生きしていたとしたら、我々にできる事はあつたらうか。彼は日本の禅宗に傾倒し、たびたびプライベート・ジェットで京都を訪れていた。永平寺で僧侶になりたいと志願した経験を持つ人となりである。

事業が順調な今であれば、ジョブズ氏が自分の時間を作り消費するために、京都もしくは関西圏で邸宅を持つ大きなメリット、需要がある可能性は極めて高い。それは大徳寺の塔頭の一つとして復興した奈良県の宇陀にある「松源院」のようなものを気に入り<sup>2)</sup>、自分も作りたかった、あるいはもっと侘びた吉野の西行庵のようなものかもしれない。

私を介して何有荘を購入したビリオネア、オラクルの創業者ラリー・エリソン氏とジョブズ氏は親友だった。70 その経験からも、もしジョブズ氏に時間があれば、ジョブズ氏は自ら「禅の庭」を「築きたい」と考えたらうと想像するのである。そこで、ジョブズ氏のような顧客と日本庭園が結びつくために必要な努力は何かを考えてみよう。



写真-1 ポートランド日本庭園

#### (2) 潜在的な顧客をもたらす装置としての海外庭園

80 こういった米国のIT長者の住む西海岸には有名な日本庭園がある。ポートランド日本庭園である。22,000 m<sup>2</sup> (6700 坪) もの大きさを持つこの庭園は、1963年に造園家の戸野琢磨教授によって設計され、1967年に開園した。ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・ガーデニング誌

85 が行った調査の結果、日本国外にある300の公共日本庭園の中で第1位に選ばれ、非常に本格的なものであると評価され、ポートランド日本庭園は「短時間の西洋の手法と風格のある東洋の表現を融合することで、非常に短

期間で発展することに成功した点は特筆に価する」とのことである。

西海岸では、IT 事業創業者及び従事者の多くがこの本格的な公共庭園を楽しんでいる。自らの美学を表現する技法の一つとして庭園づくりの楽しみを覚え、さらには「視線によって支配する」日本庭園<sup>3)</sup>の所有へと夢をつないでくれているともいえるだろう。海外の日本庭園をよく知ることは顧客との接点を知るという意味で大きな意味を持っている。

### 10 (3) 普遍化：顧客との邸宅ビジネス成立のための課題

マーケティングでは、日本庭園の美に対する欧米人の嗜好や理解への取り組みについて、現状を知らなくてはならない。品質の伝達では、芸術作品として、日本庭園を購入しようとする人に、作品の奥深さを説明するための解説書はあるのか、解説はピリオネアのような極めて知的水準の高い人に、フィットしたのかどうかを点検しなくてはならない。

欧米がどのように「日本美」の理解に取り組んできたかについて考えてみよう。

20 この分野では「欧米人の日本庭園観」<sup>4)</sup>という、16世紀末～現代までを長期に渡り丹念に研究し、多様な観点で、様々な手法をもって客観的に分析が行われた多くの研究が集成された研究成果がある。同書では「現代欧米人、特に研究者、知日派などの日本に関する専門家の日本庭園に関する知識レベルにおいて、一般的な日本人よりも高い認識に至っている」とあり、現在のピリオネアが日本庭園の購入に動き始める予兆を感じさせるものである一方、結論部分で「日本庭園の美は自然石の理解が必要だが、欧米人には無理」とある。

30



図-1 何有荘の全体図

少なくとも、私が売却した何有荘の購入者、ラリー・エリソン氏や仲介したクリスティーズ・グレートエステートの関係者は、庭園における巨石の意味を十分に理解していたと考える。むしろ、オラクル（神託）を社名に

掲げ、大成功した経営者であれば、神話世界や宗教学について誰よりも研究し、石の普遍的価値を見いだしている40たと考えるべきだろう。

残念な事に調査は「庭園研究」に偏っていたため、建築家やフランスの風景論に足場を置く、歴史・地理学的方法を総合した文化的ランドスコープ論というところまで分析が及んでいなかった可能性がある。非常に優秀な、45そして強い興味を持った欧米人を顧客とするには今後とも研究を継続して再度確認し、庭園とその環境について情報を整備していく必要があるだろう。

日本庭園の美に、最初に魅せられた外国人の集団は、フランスの印象派の画家達である。モネの「睡蓮」とい50う一連の作品は、その象徴的なものであり、その後の西洋美術世界に「ジャポニズム」として、大きな影響を与えていった。



55 写真-2 桂離宮

その影響を受けて 1933 年、日本にあこがれてやってきたのが、ドイツの建築家ブルーノ・タウト氏である。タウト氏の「忘れられた日本」で描かれている桂離宮への賞賛は、日本情緒が大好きで、かつ美的に鋭い欧米人の感性と審美眼による優れた解説である。しかも、多数の素晴らしい作品を残した建築家として、建築内部から、庭園の鑑賞方法を日本人以上に、詩的に解説してくれているのである。

65 「最初に現れる和やかな田園詩、せせらぐ流れと小瀑。そのあたりから厳粛な変貌が始まる。荒磯に見るような粗石、岬の端、その『外端』に立つ一基の燈籠。厳粛な相を帯びた石は、訪れる人に「静思せよ！」と叱咤するのである」<sup>5)</sup>

70 この文章を読めば「自然石の理解は欧米人には無理」ではないと分かる。深い教養と景観を読み込む審美眼が

あれば、日本人以上に自然石の理解が可能であることを証明している一文だろう。少なくとも私には、桂離宮の小窓から自然石が見えたとして「静思せよ！」というメッセージを読み取れる自信はない。離宮の華やかさに心躍らされて、わくわくどきどきするばかりである。

残念な事に、タウト氏の文章は日本では愛されているが、欧米で広がっている様子はあまりない。それ故、欧米で、彼の審美眼に基づいた日本の空間美について理解が進んでこなかった。さらにいうと、日本人自身の問題もあるだろう。日本庭園に関して、写真や広報的な解説書は多数あっても、文化人類学・宗教学の専門家が学術的、審美眼的に、日本庭園を分析し解説した研究はあまり多くないのではないだろうか。

例えば、宗教学者のエリアーデ<sup>6)</sup>は石に力を見だしそれを「クラトファニー（顕現）」と規定し次のように解説している。

「岩は人に、人間の条件の不安定さを超越しているあるものを啓示する。すなわち絶対的な存在様態である。石の抵抗感、その不動性、その大きさ、またその奇怪な外形などは、およそ人間的ではない。それは眩惑し畏怖させ、引きつけ、脅かすものが現前していることを証している。人は石の大きさ、固さ、形、色において人間が属している世界とは別の世界に属する实在、力に遭遇するのである」

このように欧米人は石の存在を理解出来ないわけではない。むしろ、我々とは違う観点で掘り下げ、普遍的な視野を持って空間を分析する。さらに、それは別の学問体系・例えば宗教学的分析として、古代のもしくは中世の人々の「石」に対する思いに立ち返って、その世界観への理解を促している。むしろ、日本人自身が「日本人はなぜ庭を造ってきたのか」「石たつことを行ってきたのか」という問いに、対して普遍的な言語や研究、欧米の空間や美学研究者に共通する用語を用いた解説がいまだに完成できていないと考えるべきではないだろうか。

35



写真－3 三輪山

日本庭園史の原点に立ち返ってみよう。和風庭園の原点とされる事が多い日本書紀において、最初に庭が示さ

れるのは齋庭である。庭のことを「さ庭」「齋庭」と表記され、まつりを執り行う空間としての庭、神域こそが庭の原型であろう<sup>7)</sup>。この認識に立てば、一挙に日本庭園の景観形成には宗教学の読み解きが重要となり、日本庭園の様々な技法に対しての神話的解釈も見えてくる。例えば、借景技法で遠くの山を取り込むのは、遠近感を用いて庭を広く作り込むためだけではない。山を遙拝するという儀礼のためである。最も古い形式を持つ大神神社のご神体でもある「山」に対し遙拝する日課が、稲作文化を基盤に持つ日本文化の農耕儀礼の根底に流れている、という解説に結びつく。そして、日本庭園の根本は「死と再生」「豊饒」のため祈りの場であり「聖なる空間」としての意義が一挙に増してくるのである。

日本庭園において何故石が重要か。滝が重要か。

それは、神聖なる三輪山に登山し、磐座を守り続け、滝を拝み・打たれるという神話的原体験が存在するからである。そして、これらの神話は「古事記」「日本書紀」に掲載される物語と一対をなす神話世界であり「聖なる空間」を出現させる技なのである。

大陸から仏教や高度な文明が入る事を通じて、庭園＝清め場を作り続けることを日本人は止めなかった。それが極めて農耕儀礼に結びついた文明の原点、日本人の宗教観に関わることだったからである。このようにして、とらえることで「宗教学」「文化人類学」といった世界の研究者と意味を分かち合い、普遍的価値の解説を可能になるだろう。

ここから、この造園技術の根底にある哲学こそが、循環型社会、持続維持可能な社会の視覚化をもたらしている、という顧客の胸に届く解説を得られるのである。

日本人の庭園分析は偏っており、欧米人が日本庭園美を充分には理解出来ないと考えていることについて、オギュスタン・ベルクは「日本の風景・西欧の景観」で厳しくその間違いを指摘している。この本は、フランス人地理学者が、世界と日本の庭園及びランドスケープを、多様な軸で客観比較し、さらに日本の造園技術への評価も与えている日本人にとってありがたい著作でもあるが、以下のように日本人には少し耳の痛いことが述べられている。ヴェルサイユ宮殿の庭と日本庭園を比較しつつ「別の文化から見ると、これらの異なる表現は人為的で自然に反するように見える。そのため他の文化は自分の属する文化ほど自然を尊重していないと、簡単に結論を下してしまう。(中略)フランス式の庭園が日本人には人為的と見え、日本庭園が韓国人にはやはり人為的と感じられるのとまったく同じである。」<sup>8)</sup>

さらに続けて、彼はデザリエ・ダンジャンヴィルの「造園術の理論と実際」と橘俊綱の「作庭記」の抜粋を比較して、「庭園を整備する人間はしばしば同じ理想を掲げてきた。すなわち自然の本質を尊重し表記するという事である。」として、庭園はどのように表現されるかは固有の文化に依存されるが、庭園造りとは「自然の本質」を

40

90

追い求めることにおいては、代わりがないのだと説明している。その上で、庭園を造ること、景観を造り出すことの真の意味を「風景の意味化」と規定した。「人間の世界に対する関係の、感覚で捉えられる表現のことである。」彼は、人間が作る「風景」とは一つの表現手法であって、そこには何らかの意味が込められているとしている。

庭園という人工的な美的空間を真に理解するには「象徴性というものに関しての人類学者、精神分析学者、言語学者の研究の蓄積を待たねばならない」のだというのだ<sup>9)</sup>。そこから文化的な象徴性だけでなく、無意識のメッセージも含めた意味を読み取り、人類学的観点で分析するだけでは足りずに、心理学・哲学・歴史学など、多様な軸で分析を展開している。果たして、我々はどのようにしたら、複数の学問的基盤に立って、庭園を観察し、解説していくことが出来るだろうか。ベルグのわずかに二行を理解するために、文化人類学だけでなく、アナル派の歴史学者アラン・コルバン「風景と人間」や哲学者フーコー「監獄のまなざし」ノルベルグ・シュルツ「実存・空間・建築」や角田忠信「日本人の脳の研究」などを読み込まないと理解出来ない<sup>10)</sup>。海外の知識層から納得される解説を構成しようとするときには、このような教養を持つ相手に、空間造形の芸術的意味を説明しなくてはならないと突きつけられているのである。

シュルツは先の書物の中で「美学的空間」について、ゲシュタルト心理学から人間が空間をどのようにして認識しているかを解説している。肉体的行為の対象としての「実用的空間」脳が理解する「知覚的空間」などの空間とは異なり「人間は、ずっと古い時代から、空間において行為し、空間を知覚し、空間に存在し、空間を考えてきたというだけではない。己の世界の構造を、現実の世界像として表現するために空間を創造してきた。そこに創造されたものは、表現的空間あるいは芸術的空間と呼べるものであって認識的空間とともに、空間のヒエラルキーの頂点に次ぐ位置を占める」<sup>11)</sup>と普遍化している。

日本庭園とは、まさしくそのような「美学的空間」の一類系の頂点に立つ。日本庭園を作ることとは「美学的空間」を造形することである。日本の庭園造形技術の高さとは「美学的空間」のトップ・オブ・トップへ挑むことといえよう。そこで何を表現し、表現を通して「次の時代はどこへいこうとしているのか」を世界に向けて発信することを日本の造園技術者は期待されているのである。

#### (4) 日本の美学的空間の解説に向けて

ベルグは、30年近くも前の著作において、空間認識における日本人の分析力と解説力の甘さを鋭くついている。それは日本の空間美に対する深い愛と、それをないがしろにしている現代日本人への叱咤激励であると考えられる。それどころか、彼は日本の建築や庭園造形こそ次の時代

ポスト・モダンに向けて、一つの「ビジョン」と一つの「預言」を日本人に与えている。

ビジョンとは、欧米の文脈をもって「ポスト・モダンの風景の潜在的な定義」への道筋、新たなパラダイムの美学を確立するためのアウトラインでもある。近代社会が西欧のパラダイムでできあがっているとしたら、次世代の新しい風景とは「近代の危機から生まれた二元論」と「もう一つの大きい風景であり伝統、東アジアの伝統において前提とされる非二元論」この二つの総合から形作られていくことになるだろうという提言である。つまり、次の時代、ポスト・モダンな「美学的空間」を造形できるのは日本の伝統的庭園技術だと、期待しているのだ。

同時に、日本庭園がもつ「美学的空間」の真の価値について、日本人が西欧の文脈で解説していく意義と意味、また、それによって世界が必要とする普遍的価値を日本の造園家が作り出す可能性を提示している。

この可能性について、さらに探ってみよう。現在は近代社会から次の社会、ポスト・モダンへの移行期である。どこまでが近代で、どこからがポスト・モダンなのかは歴史家が決める仕事だ。しかし、今を生きる現代人は、常に明日を知ろうとする。その先が見えるビジョナリーな人こそが時代を切り開く人であり、成功したビリオネアとなれるからだ。ここまでまとめあげれば、まさしくビジョナリーであるジョブズ氏の心に響く解説に近づけるだろう。

ジョブズ氏が愛した「禅」。彼は、いつも黒いタートルネックを着用していた<sup>12)</sup>。「作務衣だった」ともいわれている。彼は、仮想空間で自分の理想を追い求めた。それが結実したのが iPhone である。彼が、三次元の別荘づくり「美学的空間」造りに挑んだとしたら「禅の庭」を作ることにはこだわっただろうと想像するのは難しくない。

ところで禅の美、禅の庭とは何であろうか。梶野利明は「禅とそれを「不完全の美」と解説している。西欧の好む「美」は、「完全なる美」である。しかし、日本で禅の影響を強く受けた美はそうではない。「不均斉」「簡素」「枯高」「自然」「幽玄」「脱俗」「静寂」の性格を含んだ美は、決して完全な美を求めない。完全には終わりがあ

るところである。禅では、之れで良いと言うことは好まない。むしろ、積極的に完全な美を壊し、自ら会得した心の状態を形という表現の中に注ぎ込んでこそ、禅の美となりうるとの立場をとる。したがって、完全なる美はあり得ない。完全なる美は形が完全なるがゆえに、作者の精神性は阻害されてしまい、入り込む余地が全く残されていない。」<sup>13)</sup> 梶野のいう「不均斉」「簡素」「枯高」「自然」「幽玄」「脱俗」「静寂」の7つの要素のいくつかは、世界の庭園の普遍的要素と一致する。どの国の庭園も、美学的空間であり聖空間である。それ故、常に「脱俗」である。「自然」に関してもベルグの主張にあるように、

文化差にすぎず、庭園を作ることは常に「自然」を目指している。「静寂」に関しても同様であろう。

このように要素を捨象すると、禅庭園の特徴に「不均衡」と「幽玄」が残る。この二つ要素が、その他の世界の庭園とは異なる、禅がめざす「不完全な美」を形づくっているのである。ところで「幽玄」とはなんだろう。能においては「幽玄」さ、とは複式夢幻能で代表されるように、一つの舞台に複数の時限（多中心）を同時に成立させることにある。これによって、奥行きのある物語を構成することができる。

ベルグも「日本の風景の美学は多中心と形容できると述べている<sup>14)</sup>が、これは能表現の「幽玄」と同じことだ。

西欧の庭園、例えばヴェルサイユ宮殿のように一点に視覚が集中するように設計されている古典的庭園にあつては、庭を見る人間も、唯一かつ固定した点で空間を認識する。しかし、日本庭園はそうではない。内部を移動しつつ、新しい「場」が産み出されることで、風景の連続性を楽しみながら、「場」が転換するという多中心的な美学空間を造づくっている。この連続性のある終わりのない空間造形こそが「不完全な美」ということだ。

そして、この「不完全な美」こそが、「鑑賞者」「作り手」の心を触発し、人の心に「余白」や「間」といった、ものを想像させるのである。常に、新しく何かを産み出すとさせる、触発させる何かである。そして、この不完全さ故に人の心に与える「何か」こそが、日本庭園を所有し、永遠に手を加え続けたいと思う「動機」である。

その庭を歩くこと、体験することで得られる「ビジョン」こそ、ポスト・モダンな時代が求める西洋の近代を超えるという「意味を与えられた風景」がもたらす「価値」なのである。そこには、一つの視点、一つの方向などに縛られることなく、多様な視点、多様な方向が世界を表現しつつも、美しく安定した景観がどっしりと見るものを迎えてくれる。多中心世界とは文化の多様性が問われる現代を象徴するものであり、それこそが、ピリオネアが世界の求める「価値」として手に入れたいものではないだろうか。

#### 4. おわりに ー日本の課題とこれからの戦略ー

残念な事に日本にはピリオネアが殆ど存在しない。この100年の間に、大きな変動が2度あった。一つは第二次世界大戦の敗戦である。この結果、財閥が解体され戦前の超富裕層は死に絶えた。二度目はバブル崩壊である。一度目は、外圧によるものだが、二度目は日本人自身自ら解体した結果である。世界では格差社会が叫ばれるが、日本にはあまり問題がないように見受けられる。むしろ、日本の問題は格差ではなく、若者の貧困とピリオネアの不在である。

ピリオネアには重要な機能がある。文化の庇護者としてのパトロネージュである。歴史的に美術や音楽など文

化のパトロンは王族・貴族や宗教者だった。経済の成長と共に富裕な資産家もそれに加わった。フィレンツェのメディチ家がその代表だろう。パトロンなしには、ミケランジェロもダ・ヴィンチも存在しないのである。

55 戦前の日本には、財界活動を通じた文化の庇護がしっかりと根付いていた。何有荘や野村碧雲荘などは、その名残である。また、高度成長期の日本にも、戦前ほどではないにせよ存在した。パナソニックの創業者松下幸之助の庭「真々庵」である。

60



写真ー4 何有荘

65 この二つの大変動は、日本のパトロン文化を完全に解体してしまった。その結果、日本の文化、伝統工芸や建築の技術はいま大変な危機に陥っている。

ところが、欧米にはいまだこのパトロン文化がしっかりと根付いている。数年前のクリスマスのニューヨークで忘れられない経験をした。

バブルの頃、日本人は世界中から様々なものを買集めていた。その中の一つに映画「カサブランカ」の有名なシーンで使われたピアノがある。映画の小道具にすぎないのだが、ハンフリー・ボガードの台詞と共に人々の記憶に残った。そのピアノの事をサザビーズに伝えたところ、副社長が当時のオークションの事を良く覚えていた。日本人に最後に競り負けたのは、現大統領「トランプ氏」だった。

四半世紀の時を経て、ピアノは再び太平洋を越えた。クリスマスを目玉としてオークションにかけるためである。購入したのは俳優のレオナルド・ディカプリオ氏だった。彼は、俳優としてだけでなく、プロデューサーとしても成功した資産家である。彼は映画の小道具にすぎないピアノを5千万円で落札し、その場でロサンゼルス

の美術館に寄附をした。彼の気持ちはよく分かる。映画産業は、俳優と監督だけがクローズアップされるが、数多くのスタッフで支え

られている。そういう陰の人たちの働きに感謝し、陽が当たる場面を作り出そうとしたのだ。それを通じて優秀な人材が映画産業に関わろうとしてくれる。それは、結果的にハリウッドの映画産業と米国文化の隆盛に繋がっていくのだ。これこそパトロネージュそのものである。

いま風前の灯火になっている日本の伝統文化。それを助けるには、日本から消えたビリオネアとパトロンを海外に求めようというのが私の提案である。現在は、中村昌生氏が呼びかける「伝統木造技術文化遺産準備会」のお手伝いをしている。この会では、伝統的な数寄屋建築や社寺建築をはじめとした大工の技だけでなく、左官や石積みの技術、さらに日本文化の神髄である「庭屋一如」として日本庭園の技術も含めてユネスコの無形文化遺産指定を目指したいと考えて活動している。

「和食」に次いで「和の建築技術」をユネスコの無形遺産にしようという構想である。目指すところは、2020年、オリンピックのタイミングである。この時、世界中から選手と共に取材陣がやってくる。その視線は新・国立競技場に注がれるだろう。

前章で、ベルグの著作には「預言」が記されていると書いた。予言と預言は異なる。預言とは「神の靈感を受けて、神託として述べること」であり「オラクル」そのものである。ベルグの預言は、著作の末尾「芸術作品の未来」として「隈研吾」の「10 宅論」を取り上げている

ことである。この本が著されたのは1989年、隈氏はまだ30代の前半のサラリーマンだった。30年の時を経て、隈氏が新・国立競技場の設計者となった。オリンピックに興味を持つ日本人であれば、メインスタジアムがザハ・ハディド氏から隈研吾氏へと代わった経緯を知っているだろう。

隈氏の述懐<sup>15)</sup>によれば、彼の経歴では、当初の国際コンペでは、参加資格すらもっていなかった。それが世論の波を受け、あれよ、あれよという間に変転し、本当に短期間のうちに彼の設計に決定したのである。「負ける建築」が勝利した瞬間である。

隈氏の「10 宅論」が三十年後を予兆させるくらいに画期的だったのかもしれない。しかし、それでも今回の決定は偶然と呼ぶにはあまりにすごい出来事だった。その新・国立競技場のモチーフは「法隆寺の裳階」である。

伝統的建築における大工の神様「聖徳太子」が、日本建

築再興のために舞い降りたように感じている。これは歴史の必然ではないだろうか。

ベルグが「新・洋館」と定義し、隈氏自身は「負ける建築」と称している新しい造形がまもなく生まれる。ベルグの預言が成就する瞬間である。そこに存在するのは、ポスト・モダンを象徴する空間となるだろう。

ここで、もう一度ジョブズ氏に戻ろう。ジョブズ氏は仮想空間に「禅の庭」を作り上げることに成功し、それがiPhoneとなった。

彼の有名な言葉がある。「自分が世界を変えられると本気で信じる人たちこそが、本当に世界を変えているのだから」

ジョブズ氏が愛した日本の「禅の庭」それを生み出す日本の庭園技術、それが世界を変えていく。

世界の空間を変えていく。私たちが世界を変えられると本気で信じたなら、変えることが出来る。

私は、そう確信している。

## 70 補註・引用文献・参考文献

- 1) クレディ・スイスの富裕層の定義は、100万ドル以上の資産家で、日本には280万人存在し、世界第2位の地位にある
- 2) 泉田宗健(2005)無へ〜禅・美・茶のこころ〜。文英堂、京都、255pp
- 75) 3) オギュスタン・ベルグ著、篠田勝英訳(1990)日本の風景・西欧の景観。講談社、東京 p20
- 4) 鈴木誠(1997)造園学論集別冊No.2「欧米人の日本庭園観」東京農業大学農学部造園学科、東京
- 5) ブルーノ・タウト著、篠田英夫訳(2007)「忘れられた日本」中央公論新社、p44
- 6) ミルチャ・エリアーデ著、久米博訳(1974)エリアーデ著作集2「豊饒と再生」せりか書房、東京 p101
- 7) さにわ【さ庭】神おろしをして、神のお告げを聞く場所。斎場。「一に居て、神の命を請ひき」古事記 中訓
- 85) 8) オギュスタン・ベルグ(1990) p34
- 9) オギュスタン・ベルグ(1990) p170
- 10) オギュスタン・ベルグ著、宮原信訳(1994)空間の日本文化。筑摩書房、東京 pp352。に詳しく解説されている
- 11) ノルベルグ・シュルツ著、加藤邦男訳(1973)「実存・空間・建築」90鹿島出版会、東京、p21
- 12) カーマイン・ガロ著、井口耕二訳(2010)スティーブ・ジョブズ 驚異のプレゼン。日経BP、東京、pp408
- 13) 榊野利明(2008)禅と禅芸術としての庭。毎日新聞社、東京、p147
- 14) オギュスタン・ベルグ(1990) p52
- 95) 15) 隈研吾(2016)なぜぼくが新国立競技場をつくるのか。日経BP、東京、216pp